佐保会兵庫県支部だより

第 36 号

佐保会兵庫県支部事務局　明石市大久保町高丘6丁目12-6 岩崎 方
〒674-0057　TEL・FAX078-935-8748

新支部長ご挨拶
「ゆっくりソフトに長～いおつきあい」

岩崎　雅美（S44　家被）

昔も今も変わらぬ行事に、卒業式後の「佐保会新入会員歓迎会」があります。どなたもこの式典を経て会員になられたことでしょう。私も四十数年前に講堂（現在、重要文化財の記念館）で出席しました。式の後半、蝋燭がステージの四隅に立てられ、黒紋付き姿の女性が静かに仕舞を舞われました。厳かで、大学の教育環境とは異なる芸能の世界に強い印象を受けました。式後にお祝いの赤飯が出たことまで覚えています。先日、『佐保会史』（2008年刊）を見る機会があり、それが長谷川千鶴理事長の時代で、昭和45年まで続いていたことを知りました。

時を経て、平成9年度の後期から創立百周年記念の平成21年度まで、奈良女子大学の生活環境学部で勤めました。赴任した当時は国立大学初の女性学長・丹羽雅子学長の時代でした。行政改革前は99の国立大学があり、学長は全て男性でしたから、丹羽学長はさぞかしご苦労が多かったことと思います。

さて、そのころ私は佐保会学内理事で、四名の中でたまたま年長者であったために、多くの司会を担当しました。その一つが、新入会員歓迎会です。新講堂で卒業式を終えたばかりの学生は明るく華やかですが、配られる卒業証書の受け取りや次の予定に気を取られ、なかなか静まりません。歓迎式のすぐ後に大学院の学位記授与式が控えていますから、短い時間で要領よく式を行わねばなりません。そのためか、この頃の式典はとても簡略化されていました。メインは理事長のご挨拶と、近畿支部からの代表者による歓迎の辞（現在は歓送の辞という）です。先輩の体験に基づいたお話は、若い人にとって大いに魅力的ですから、さすがにこの時間帯になると静かで愛すべき新入会員になっていました。本部からの記念品は、あせびのバッジ、祝菓、（社）佐保会定款などです。式後ロビーでは、佐保会員の教員らが一人一人に声を掛けながらそれらを手渡し、見送っていました。学内には佐保会員と思われる母親や祖母らしき人も見かけ、伝統を感じさせる素敵な光景でした。

フラワーアレンジメント
岡本郁子（S40家住）

さて、『佐保会報』185号でお知らせがありましたように、社団法人佐保会は平成24年8月1日から「一般社団法人佐保会」に移行しました。それに伴い支部活動は、形式的には別の「奈良女子大学同窓会佐保会」の組織に組み込まれています。

兵庫県支部では毎年五・六月ころに総会を行い、新入会員を歓迎しています。同窓会は大学時代よりも地域に根ざした長～いおつきあいの場ですので、是非出席して、ゆっくりソフトに愉しんで頂きたいと思います。

支部会員の皆様、何かと至らないと思いますが、どうぞよろしくお願い申しあげます。

平成24年度　佐保会兵庫県支部総会

平成２４年５月１２日（土）　楠公会館　菊水の間

一日の気温変化が著しい中、ちょっと肌寒い外から、すっかりお馴染みになったほっとな楠公会館菊水の間へ。ガラス窓越しに新緑が映えて、学生気分の若やぎを盛り立ててくれました。

平成24年度佐保会兵庫県支部総会はこの一年に逝去された方々に黙祷を奉げて始まりました。

山本支部長は先ず、六年間支部長を務めてきてやっと、若い方へバトンタッチできる運びとなった喜び、川口志ほ子さんを偲ぶ会では「交響詩姫路」の音楽が奏でられての感銘、また本日は佐保会生駒節子前理事長の偲ぶ会にご出席の方々もいらっしゃること、「一般社団法人佐保会」として、会館も手放すことなく発足、第一回総会は九月第一日曜日開催予定で、支部行事も本部に合わせて変更があること、一方異常な大竜巻や若者による度重なる無謀運転追突死傷事故、国内外の政治・経済のもたつきは時代の節目か、とにかく注視していきたい。この六年間で、支部だよりのA4版化・名簿作成・ホームページ規約を作成実施。支部会則の見直しは今後に。笑顔を忘れず、参加者を増やす工夫・改善策を事務局までとの課題提起で結ばれました。

新入会員30名の紹介後、山本議長の下、事業報告、会計報告、会計監査報告に続き、東日本大震災義援金について、62万5千余円を佐保会本部に届けることが出来たとの報告と会員の皆様のご協力に対して感謝の言葉が述べられました。

そして、平成24年度の新役員紹介、承認、ご挨拶。岩崎新支部長は母校に奉職し、佐保会学内理事として卒業生と同窓会を結ぶ役目の大切さを痛感、諸先輩のご苦労に思いを致し、支部長の任をお引受けしたと抱負を語られました。

新支部長を議長に、事業計画、会計予算が発表になり、それぞれ承認されました。

橋詰ケイ子様の「瑞宝双光章」叙勲のお披露目後、恒例の記念品贈呈では、昭和18年ご卒業の4人の方に卒寿祝の奈良の扇子、32年ご卒業22人の方々には卒後55年祝としてお箸が贈呈されました。代表者の「これまで色々乗り越えてきたことが多々あったのだから、これからもしぶとく生き永らえるぞ」との温しい一言が印象的でした。

続いての講演「レコード大国だった関西」の講師は、神戸新聞文化財団・松方ホール館長の山崎　整氏、実は小・中・高の同窓生がいることを知り、大いに照れながら、扇子はいつも放せないと熱っぽく、私たちの世代にはとても懐かしい音源のレコードを記録としての音楽史の中で次々に聞かせて戴き、成程と頷きながら、思いがけず青春を蘇らせて若々しい弾む声があちこちで上がりました。

休憩後、ご来賓の菅江謹一先生は、ご近況を交えて社会に役立つことを、健康第一にとお話し下さいました。

会食の後、本部理事より佐保会本部一般社団法人代議員八人の推薦について、また「樑の会」や「ホームページ研究会」から夫々報告がなされました。「睦会」担当の44年度卒代表者からは、11月12日に芦屋市の「ホテル竹園」で開催予定との発表、東灘区もより会が今年度から「読書会」を立ち上げ、クリスタルタワー4Fで開催予定、参加を呼び掛けられました。同窓姉妹の快挙活躍のお話には姿勢を正され、周囲から聞こえる美しい歌声に聞き惚れながらの校歌斉唱、参加者39名更に元気に散会しました。

（写真は岡田山のご自宅での菅江先生）

（唐島記）

校歌　貞時生作詩

春日のやまにいづる日の
くもるゆひかりあふぎつつ
かぎりやこころの花ざくら
つねよまことのさしべぐさ
美なもと清き佐保河の
みぎはの柳うちはへて
ふるきをたづねあたらしき
道にすすめやとすちに

川口登美子書
（S39家食）

叙勲のお祝い

平成23年秋高齢者叙勲
「瑞宝双光章」受章
橋詰ケイ子 様（S18家）

卒寿のお慶び

（昭和18年卒業）
金丸　壽子 様（文）
内藤　一子 様（文）
橋詰ケイ子 様（家）
内匠　慶子 様（保）

卒後55年のお慶び

（昭和32年卒業）
中村　京子 様（理物）
冨岡　和子 様（家食）
井上　友子 様（家住）
榎本　邦子 様（理数）
井上芙紗子 様（家被）
森下　温子 様（理化）
植田　治子 様（文英）
尾崎智恵子 様（文教）
小野　　順 様（文国）
柴田　榮子 様（理数）
坂井　榮子 様（文教）
實方　充代 様（文幼）
小林美枝子 様（理数）
安藤　晴美 様（文幼）
植田　明子 様（家住）
溝田　総子 様（文地）
岡野　明子 様（文英）
高田美知子 様（文英）
村田　正子 様（家食）
林　　茂代 様（文国）
橋尾　信子 様（理物）
日野千恵子 様（文英）

会次第

物故者に対し黙祷　司会　松本佳代子（S44文英）　永田登喜代（S45理数）
1. 開会のことば
2. 支部長挨拶
3. 新入会員紹介　山本よしみ（S33家食）
4. 議長選出　山本よしみ　司会者
5. 議事
　①平成23年度事業報告　岩崎　雅美（S44家被）
　②平成23年度会計報告　村田　好子（S39家食）
　③平成23年度会計監査報告　實方　充代（S32文幼）
　④東日本大震災義援金について　山本よしみ
　⑤平成24年度役員承認及び紹介　山本よしみ
　議長交替
　⑥平成24年度事業計画　中井　昌子（S43家食）
　⑦平成24年度会計予算　村田　好子
　⑧その他
6. 記念品贈呈
　①卒寿のお祝い（昭和18年卒業4人）
　②卒後55年のお祝い（昭和32年卒業22人）
7. 講演
　講師　神戸新聞文化財団　松方ホール館長　山崎　整先生
　演題　「レコード大国だった関西」
　―休　憩―
8. 来賓の挨拶　菅江　謹一先生（名誉教授・理学部化学）
9. 会食
10. 各部報告
　①本部　瀬川　順子（S41文英）
　②「樑の会」　片寄眞木子（S36家食）
　③「ホームページ研究会」　中村　京子（S32理物）
　④「睦会」平成24年担当者紹介　昭和44年卒業者
　⑤「支部だより」第36号編集委員紹介　芦屋地区
　⑥その他
11. 校歌斉唱
12. 閉会のことば

―　哀　悼　―

寺尾喜美子 様	（S33家住）	H23.5.26没
川口志ほ子 様	（S19　文）	H23.7.11没
北川　秋子 様	（S14　理）	H23.7.25没
谷澤　郁子 様	（S20　文）	H23.8.9没
松岡　悦子 様	（S25　保）	H23.8.18没
安藤　紀子 様	（S38理生）	H23.5.17没
岡村　はた 様	（S19　理）	H23.10.6没
板倉　恵美 様	（S18　理）	H23.11.5没
竹崎美佐保 様	（S18　文）	H23.11.26没
吉田　俊子 様	（S22　文）	H24.2.22没
永田　容子 様	（S31文英）	H24.4.16没

平成25年度支部総会
平成25年6月16日（日）
神戸凰月堂ホール
JR／阪神　元町駅下車すぐ

～講演～

「レコード大国だった関西」

講師　山崎　整先生
（神戸新聞松方ホール館長）

山崎整先生の講演は昔語りになったレコードについて、レーベル（レコードの中央部に曲名・演奏者などを記した円形の紙）に関する話題から始まり　①レコード製作会社が関西に多かった理由　②レコードの発展をたどる　③昔の音を感じ取ること等に焦点を当てられたものです。不十分ながら以下に要約して紹介します。

レコードはエジソンが蓄音機を発明して以後、円筒式（明治）→SP（ラッパ式：大正期）→SP（電気式：昭和前期）→LP・EP（戦後）→CD（平成初期）→ダウンロード（現代）と発達した（括弧内はほぼ対応時代）。

古いレコードのレーベルによれば、製作会社の所在地は関西がとても多いことに気がつく。その理由は関東では理解できない関西の芸能を関西人によって出す目的や意気込みがあったからであろう。

レコードの音色からは収録技術だけでなく、演奏技術の発達も分かる。特に、大正末期（SPの発明は1925年）から昭和10年までの変化が著しく、この期間が成長期である。昭和4年頃はまだ稚拙で鑑賞対象と考えにくいが、昭和10年のレコードは十分鑑賞に堪えられる（講演は納所弁次郎作曲による鉄道唱歌を始め、松井須磨子のカチューシャ、童謡、N響の交響曲演奏などのレコードを聞き比べながら進行した）。

その後躍進期が訪れる。躍進前期は演奏がぶっきらぼうであるが、次第に洗練されレコード全盛期になる。躍進期にはオペラ歌手が多く活躍した。バイオリン演奏、ジャズ、漫才（萬歳）演芸なども含め、水準が飛躍的に向上する。童謡の頂点は昭和35～36年頃だろう（久保木幸子歌、村の船頭さんを鑑賞）。

殊のほか暑がりという氏は扇子を片手に、壇上とプレーヤーの間を行ったり来たりしながら音の聞き分け実演を混じえて軽妙にレコード史を展開されました。

副支部長が「レコードは文化現象の宝庫。これまで、ダウンロード世代の前で肩身の狭い思いをしてきたが、山崎先生のお話を伺って、その世代であったことにほっとしました。」というお礼の言葉で締められました。

（山崎古記）

SPレコードレーベル図鑑より引用
http://zariganisan.web.fc2.com/hp5.htm

「絆」の喜び

前支部長　山本よしみ（S33家食）

平成18年度の総会で支部長に就任し事務局を引き受けて、六年間佐保会兵庫県支部の仕事をしてきました。行き届かない点があり支部会員の皆様にご迷惑をおかけしたと思います。自分では精一杯責任を果たしたつもりです。お許しください。心身共に、これ以上責任を果たす自信を失くしました。支部長を退任するに当たり、いろいろとご協力いただいた方々に厚くお礼を申し上げます。

六年間休みなく入ってくる情報に対応し、皆さんに迷惑をかけないように自分ながらよく果たしてきたと自画自賛しています。

事務局は支部活動の元締めになり総会、役員会、地区リーダー会、支部だより引き継ぎ会、もより会、楪の会、ホームページ研究会、本部と共催の佐保塾2回等の企画運営を二十人足らずの役員が分担して果たしてきました。一つの仕事を二人で責任を持ち、全員が協力していかなければできません。家族のことや生身の人間のかかえる問題とたえず向き合う活動はボランティア活動の宿命であり、信頼と和合の基盤がなければできないでしょう。役員の皆様の善意に支えられてこそ今日の日が迎えられたと思います。また、初顔合わせのメンバーが心を通わせながら多くの課題をこなしてこられたのは、ひとえに同窓会の「絆」で強く結ばれていたからです。議論をしながらお互いの意見に耳を傾け共通理解を深めていきました。時には眠れない夜もありました。先輩の築いてこられた歴史を大切に無事六年間の責任を果たせた安堵の喜びを噛みしめています。自分ながらいい体験ができたと思います。

ありがとうございました。これからは佐保会の「絆」の喜びに浸りながら余生を楽しく過ごしていきます。

平成24年5月末日

平成24年度　新入会員（30名）

（敬称略）

学部	氏名	地区	学部	氏名	地区	学部	氏名	地区
文日亜	柳父理佐	神戸市東灘区	博前住	奥野加奈	宝塚市	文古代	森田佳那	揖保郡
生環住	大江由起	神戸市東灘区	博前食	大塚朋代	宝塚市	理化	武内沙耶	三田市
文心理	横尾菜摘	神戸市中央区	理物	稲田なつみ	明石市	理情	青木綾音	丹波市
生環文	浅井美帆	神戸市北区	生環住	田中美帆	明石市	生環健	古川雅子	丹波市
文スポ	早坂淳	尼崎市	理化	石原優	加古川市	理物	定元美穂	豊岡市
文子ども	中江美智子	尼崎市	生環文	井上瑠璃香	加古郡	博前食	小嶋千明	豊岡市
文子ども	黒田美智子	尼崎市	文古代	藤井花菜	姫路市	文欧米	藤原有紗	美方郡
理物	横山久美子	西宮市	文子ども	山下陽子	姫路市	文教文	福本真理	美方郡
生環住	佐保田理恵	西宮市	理数	筑後友貴	姫路市	理数	吉井沙織	島根県
生環住	上平三結	宝塚市	理数	前田知美	姫路市	理生	和阪奈緒子	広島県

楪（ゆずりは）の会　平成25年度（含24年度2、3月）　行事予定

月　日	内　容	会場・行先	時　間	講師（敬称略）	備　考
H25年 2月28日（木）	ランチ・コンサート	ドンク 阪急岡本グルメ館	11:30～15:00	土田　景介 田中　靖子	会費（会員）3,500円 （会員外）3,800円 申し込み要
3月28日（木）	折り紙を楽しむ	神戸市勤労会館	13:00～15:00	田中　明子	折り紙は用意します
4月25日（木）	バスツアー 「新緑の播磨路（やしろの森）へ」	やしろの森公園 県立考古博物館　他	集合時間…9:20 場所…三宮東急イン前 帰途土山停車予定		会費（会員）4,000円 （会員外）5,000円 申し込み要
5月23日（木）	文学「古典を読む －建礼門院右京大夫集より」	神戸市勤労会館	13:00～15:00	林　茂代	資料は準備します
6月27日（木）	食文化　調理実習 「南蛮料理としっぽく料理」	生活創造センター（クリスタルタワー4階）	13:00～15:00	片寄　眞木子	材料費　500円 申し込み要
9月26日（木）	ワークショップ 「折り紙建築」	神戸市勤労会館	13:00～15:00	永福　より子	材料費　200円
10月24日（木）	美術鑑賞	神戸市勤労会館	集合時間…13:00 場所…1階ホール	学芸員	解説付き鑑賞 入館料　実費
11月28日（木）	「人体にすみつく常在菌」の話	神戸市勤労会館	13:00～15:00	長田　久美子	資料は準備します
H26年 2月27日（木）	ランチ・コンサート	ドンク 阪急岡本グルメ館	11:30～15:00	土田　景介 田中　靖子	会費（会員）3,500円 （会員外）3,800円 申し込み要
3月27日（木）	奈良「平城宮跡散策」 －天平ヒストリアー－	資料館、大極殿、朱雀門、歴史館　他（約2.5km）	集合時間…11:00 場所…近鉄西大寺北改札口	案内は奈良まほろばソムリエ	昼食・拝観料は実費（2,600円程度）

＊事情により日時・内容等変更することがあります。＊入会は随時、佐保会員以外の入会も歓迎　＊会費　年間1,000円、当日のみ参加300円
＊申し込み要のものは下記の運営委員、又は楪の会のEメール（yuzuriha@ml.saho-hyogo.girlfriend.jp）にご連絡下さい。
年間行事の近々の予告や終了した行事の内容は「佐保会兵庫県支部」のホームページにＵＰされていますので、ぜひご覧ください。

平成24年度　運営委員　片寄　眞木子（06-6433-1420）　山下　知子（078-822-0939）　田中　明子（079-492-0323）
永田　登喜代（079-423-5198）　中井　昌子（072-781-9482）　大塚　かよ子（079-222-2671）

「楪の会」に集う・学ぶ・広がる

片寄眞木子（S36家食）

「楪の会」は平成17年に従来の「佐保婦人学級」と「若草」を発展的に統合して発足し、佐保会員、また会員外の参加者を募って講座、実習、見学などを年八回以上開催しています。

平成23年度は見学3回、講座4回、ランチコンサート1回を実施しました。

10月27日の「明石歴史散歩―宮本武蔵と柿本人麻呂―」は、秋晴れの明石駅に集合後、埴岡真弓姉の案内で、明石城、本松寺、月照寺、柿本神社、長寿院など、明石の名所旧跡を歩きました。専門家の詳細な説明に、歴史ファンの歴女の面々には満足度の高いツアーでした。

11月24日の美術鑑賞は、神戸市立博物館の「和ガラスの神随―びいどろ史料庫名品選―」でした。時代背景、製造過程等をわかりやすく解説していただいた後、国内最大級のコレクションともいわれるびーどろ、ぎやまん、切子などを鑑賞しました。息を呑むような美しさに時を忘れるようでした。

久々の「文学―俳句」は古川起与子姉のご指導により、句会を体験することが出来ました。参加者各々が投句して選句しました。この日の高得点句は兵庫県支部ホームページ、楪の会をクリックするとご覧いただけます。四季の移ろいや心情を簡潔な言葉で表現できる俳句に魅せられたことと思います。

「古典―平家物語」は昨年度に引き続き、林茂代姉のご指導で、平家物語の巻第一、殿上闇討を講読しました。また、平家公達の装束の絵を見ながら、八百余年前に思いを馳せたひと時でした。

詳細はどうぞHPをご覧ください。

第12回佐保塾史蹟めぐり～よみがえる丹波竜と立杭焼の郷を訪ねる

片寄眞木子（S36家食）

春まだ浅い平成24年3月15日、（社）佐保会と兵庫県支部との共催で開催した佐保塾は、丹波路探訪の旅でした。

三田市にある「兵庫県立人と自然の博物館」は、世紀の大発見として知られる、丹波市の渓谷から発掘された約一億一千年前の恐竜化石の研究と展示で有名な所です。「ひとはく恐竜ラボ」では、顕微鏡下での緊張度の高いクリーニング作業に携わっておられる研究員のご苦労を知りました。博物館三階の展示室での圧巻は、丹波竜と名づけられたティタノサウルス形類の化石発掘の様子や復元模型のすばらしさです。さらに昨年、鳥に近い恐竜・デイノニコサウルス類の化石が丹波竜と同じ篠山層群から発掘されるなど次々と明らかにされる化石類から、太古の時代に種々の恐竜がこの丹波の地を闊歩していたことに感動を覚えました。

「兵庫陶芸美術館」は丹波立杭焼の郷に七年前に開館した県立美術館で、丁度開催中の特別展『柳宗悦と丹波の古陶』を鑑賞することができました。柳宗悦（1889～1961）は民衆の生活の中で使われていた工芸品の美しさや価値を見出し、民芸という言葉を生み出した人です。多数のコレクションに触れて、氏の美意識に共感した方も多いことと思います。

ホームページ研究会報告

中村　京子（S32理物）

ホームページ研究会では昨年来プロバイダーの容量アップを図ってまいりました。

本年はこれにより、「佐保会兵庫県支部だより」全ての電子化を進めています。

一方、会員対象に「サロンドパソコン」を設け、はがき、ブログ、動画作成などを組みました。

また「パソコンで開く新しい世界」を3月に予定しています。お誘い合わせてご参加下さい。

平成23年度睦会報告

畑岡美智子（S43理生）

睦会の長い歴史の中で初めて姫路で開催しました。交通の便良く、すぐに分る駅前のホテル日航姫路を会場にし、修理中の姫路城・天守閣を間近に見学していただくことも考慮して早目の時間を設定。心配しましたが、例年同様33名の出席を得ました。残念だったのは地元からの出席が思ったより少なかったことです。主な世話人五人、準備の時間を楽しみながら、それぞれの持ち味を生かしたプログラムを考えました。

梅酒で乾杯、会食、続いて「和やかタイム」として姫路紹介を兼ねてご当地クイズ（正解者には奈良女子大学レターセット）、並びの年齢（66、77歳）に近い三人の方にスピーチを依頼、厄除けに書写塗のチョーカーをプレゼントしました。最後に「みんなで歌いましょう」と学生時代によく歌った秋の歌を集めて歌いました。皆で歌うのは久し振りで、好評だったようです。

今回は卒業年度の枠を越えた会にしたいと考えて席を決めました。睦会はそれができる会だと思ったからです。世話人のやや強引なやり方にもご協力いただき、お蔭様で盛会に終わりました。有難うございました。

西宮・芦屋地区合同もより会報告

唐島幸子（S43文英）

前年度芦屋地区もより会は「市制七〇周年記念―芦屋モダニズムとライフスタイル展」の芦屋市美術博物館見学だったこともあり、支部だより引継ぎ会兼合同もより会を1月15日芦屋モノリス（モダニズム建築）で開催。大先輩方にもお出で頂き、15名の出席。シンプルな白い小部屋で、フランス料理をあれこれ詮索しながら耳を欹てる。西宮の方々から支部だより作成の、街道歩きや執筆者探しのエピソードなど楽しかったことを沢山聞かせて戴いた。皆で「四季の歌」や「奈良女子大生一週間の歌」を歌って学生時代にタイムスリップ。後半の「編集拡大会議」で種々検討。十年前に担当された先輩方からも励ましの言葉を戴く。顔を合わせるともう古い知合い同然になるという同窓生の不思議を実感、ほっこりしました。

地区リーダー会報告

松本佳代子（S44文英）

平成24年8月23日、神戸市立勤労会館にて開催の会には18地区のリーダー、楳の会・ホームページ研究会・睦会の各代表、支部だより編集委員と事務局の計34名が出席。十年超のベテランリーダーから新任の方まで各地区の実情に合わせ、工夫しながらもより会を引き継いでおられる様子が窺えた。リーダーの交代や参加者の固定化など課題はあるが、参加者の笑顔が存在の意義であり喜び、との声を頂く。皆様ご参加を！

平成24年度　地区リーダー

（敬称略）

地区・市区・郡町		氏名	卒業年学部
神戸市	東灘区	長田久美子 松本佳代子	S39理　生 S44文　英
	灘区	河瀬　真理 井上　真理	S59理　生 H04人博生
	中央区 兵庫区 長田区	高橋　淳子 長田真寿美	S50家　被 H08家修被
	北区	川崎栄理子 清水　陽子	S51文　英 S57理　生
	須磨区	光上記久子 大橋　節子	S35文　幼 S41文　英
	垂水区	八巻　和子 山本　裕子	S50理　数 S52文　国
	西区	山中　邦子 新小田淑子	S53文　英 S59理　化
阪神	尼崎市	辻本　久代 山城　隆子	S40家　食 S40家　食
	西宮市	溝端　玲子 石塚　明子	S41文　地 S44文　国
	芦屋市	山﨑古都子 唐島　幸子	S43家修住 S43文　英
	伊丹市	狩野　千枝 平野　恭子	S45理　化 S52家修食
	宝塚市	牧　桂子 村井　和子	S44文　英 S44家　被
	川西市 川辺郡猪名川町	萬代千鶴子 前野　静代	S31文　教 S41文　英

地区・市区・郡町		氏名	卒業年学部
東播磨	明石市	青山　宏子 森　光子	S42理　化 S43理　数
	加古川市 高砂市	永田登喜代	S45理　数
	加古郡播磨町・稲美町	田中　明子	S43文　幼
北播磨		松山　和子 松本　良子	S45理　数 S52理　動
西播磨	姫路市、相生市 赤穂市 たつの市 宍粟市 揖保郡太子町 佐用郡佐用町 神崎郡福崎町・市川町・神河町	西本　美里 雲丹亀いずみ 中川　順子	S51文　国 S52家　食 S53家　住
但馬	豊岡市、養父市 朝来市 美方郡新温泉町・香美町	米田　純子	S40理　動
丹有	三田市 篠山市 丹波市	森　由紀 小林　嘉子 三角三紀子	S54家　院 S37家　被 S44理　数
淡路	洲本市 淡路市 南あわじ市	平野真寿美	S44理　化

減災特集

3・11からの私の新たな旅立ち

昨年の東日本大震災はマグニチュード九・〇、巨大津波、福島第一原発事故を伴い、死者・行方不明者は1万8683人にも。―17年前私たちは痛感していた筈ですが―生と死、家族や地域社会との絆、環境や健康、エネルギー問題等で、再度ライフスタイルを見直すよう迫られています。「大切なものとは何か」「あらためて見えてきたものは何か」等思いを寄せました。

論考　減災のコンセンサスをつくる

山﨑古都子（S43家修住）

私は阪神淡路大震災だけでなく伊勢湾台風にも被災し二つの巨大災害を経験しています。住居学を専攻している私はその体験を無駄にしてはならないと思い、減災教育に微力を傾けてきました。それがここで減災を論考することになった理由です。

さて、6400余名の命を奪い、生活を引き裂いた阪神淡路大震災から17年が経ちました。あの日から一・一七は兵庫県民の生活史の一つとなりました。しかし、自然は容赦がありません。次々と巨大災害が発生し、昨年東北を襲った巨大津波は世界中を震撼させました。計り知れぬ不安に陥ったのは私だけでしょうか。このような巨大災害の続発は自然が人間を超越し、人間には自然の破壊力を克服できないことを警告しているとも言えます。

従来、自然災害対策はハードな施設に頼る「防災」が中心でしたが、近年の経験を通して、防災ではなくソフトも含めた減災へと切り替える機運が生まれています。アメリカでは従来から「Disaster Reduction」が中心でしたが日本ではやっと「減災」に注目が集まり始めた段階です。

芦屋市被災地図の一部（赤は全壊家屋）

そもそも自然災害は自然の物理的現象ではなく、物理的現象に社会の脆弱性が誘発されて露呈する状況であると言われます。一方、人々は非日常的な危機を考え続けるストレスを回避しようとして（正常性バイアス）、「自分の行動は大勢と同じ」だから大丈夫だと思い込み（多数派同調バイアス）、現実から目をそらし、社会の脆弱性に対して無関心になってきました。

自然の制御や克服はできませんが人間が生み出した脆弱な社会事象を改善することはできるはずです。そして「一人でも多くの命と、一つでも多くの財産を守る」減災なら誰でも必ずできます。

では何をすれば良いのでしょうか。

第一は小さな被害を受け入れて大きな被害を減災するための日頃からの準備です。家具の転倒防止、持物を減らすことから始めましょう。かつては濃尾平野の輪中地帯には洪水に備えた生活様式が残っていました。甲斐の国の信玄堤も有名です。増水した川の水を遊水用の農地に引き込み、大難をやり過ごそうとしました。遊水池は雨量が多い世界のあちこちにありましたが、経済発展が進むにつれて関心を失っていきました。昨年タイで長期にわたって続いた洪水は、遊水池が工場団地などに開発され、また雨季と乾季の生活様式を忘れたことも遠因にあると言えましょう。

次に、阪神淡路大震災以後注目が集まった「共助」も重要な減災です。あの地震で救助された人の約八割が民間人の手によりました。あの時は被災箇所が消防署のキャパシーを超え、加えて、水道及び交通マヒなど、インフラの破壊が救援活動を妨げました。「公助」の限界が露呈した反面、コミュニティの共助が発揮されたのです。

女川の町を望む

第二の減災は二次災害を出さない社会ルール作りです。例えば電話や道路は円滑な救援活動の大動脈ですが、当時電話が通じず、国道二号線が大渋滞を起こしていました。その芦屋の町で、治療を待ちわびる負傷者のために市の関係者が国道二号線に辻立ちをして、目の前を通過する大阪ナンバーの救急車を捉えたと報じられました。あの時、電話がビジーでなければSOSの声が届いたかもしれない、道路が渋滞しなければ救急活動の時間を短縮できたでしょう。救える命があったはずなのにという思いは今も脳裏から消えません。

さらに東日本大震災では原発による取り返しがつかない二次災害を経験し、多くのことを学びました。私たちは災害時だけでなく日常において減災社会のルールをつくる必要があると思います。

また「遺体の収容所でボランティアが検視の手伝いをされていた。お身内が亡くなられたのだと思うほどの顔つきだった。」（北村春江「災害と地方自治体」『立命館大学百年史』第20号、219頁）。このような真摯に向き合うボランティアの姿は社会に絆を取り戻し被災者に力を与えてきました。

ところで、芦屋市は人口約九万人の小さな都市です。市長には辻立ちを後押しするように、市民の顔が見えたのではないでしょうか。平成合併が進み、市民同士の顔が見えなくなっていますが、私は小さな町の方が減災都市だと思っています。

第三は災害に起因する弱者を生まない社会を作る減災です。阪神大震災、東日本大震災など巨大災害の後に孤独死・自死などの傷ましい出来事が多発しています。住み慣れた居住地から引き裂くような、或いは地域産業を衰退させるような復興や、生態系の破壊等は避けたい課題です。

最後に減災教育の取り組みです。「教師の意識が変われば学校が変わる。学校が変われば子どもが変わる。子どもが変われば保護者が変わる。保護者が変われば地域が変わる。」これを活かすように東日本大震災では釜石市の小・中学生が育んできた想像力が地域住民を助けています。生きる力を育む教育と共に、過去を伝え、減災の文化を創りつなぐ減災教育に育てたいと思います。

特別寄稿

シルクスクリーン版画家　代情房子（S41文英・神奈川県支部）

（母船・地球号の守りⅢ　65×50㎝）

母船・地球号の守りⅢ（2010）

〈第89回朱葉会記念展に寄せて〉

地球環境の保全を祈る「四神シリーズ」の第二弾・白虎の作です。

21世紀初頭の人間は、化石燃料の大量消費によってもたらされた諸々の問題に対処しようとクリーンエネルギーの確保を始め様々な方法を試み、生命体の母船・地球号を守ろうとしています。それでその努力が報われますようにと、黄道上に現れた秋の神・白虎と、羊・申年生まれの人の守護仏・大日如来と、丑・寅年生まれの人の守護仏・虚空蔵菩薩（地球の両極上にたなびく雲は、守護仏の梵字をデフォルメしたものとに祈る作です。

（母船・地球号の守りⅠ　65×50㎝）

母船・地球号の守りⅠ（2009）

〈第88回朱葉会記念展に寄せて〉

2005～2008年にかけての「四神シリーズ」は、東西南北の守護神としての視点から四神を取り上げ、世界平和を祈る作品でしたが、2008年にアメリカで発生した金融危機によって、世界中が同時不況に落ち込み、2009年の年明けは非常に暗く、環境の悪化が取り沙汰されながら、対策は滞りがちで、もはや四月を迎えてしまいました。そこで「四神シリーズ第二弾」は、春夏秋冬の神としての視点から四神を取り上げ、我々生命体の母船・地球号の環境保全を祈る作品をと思い、桜と青竜による「母船・地球号の守りⅠ」をお届けすることにしました。

・・・中略・・・

「このまま地球環境の悪化が進めば、将来世代の人々は桜咲く春の幸せを享受出来なくなるのでは」という不安が胸をよぎり、羽の美しさ故に乱獲され、人間の欲によって絶滅させられた"トキ"ニッポニア・ニッポンの幻影が脳裏をかすめました。

そこで月探査衛星「かぐや」が捕らえた我々の母船・地球号の映像が浮かぶ虚空に、絶滅させられた"トキ"の幻影が現れ、「人間の欲望を暴走させれば、地球号そのものが同じ運命を辿ることになりますよ」と警告しているとして、人間が正しい道を進み、母船を守る事が出来ますようにと、黄道上に現れた春の神・青竜に祈る作ですが、さらに午年の守護仏・勢至菩薩と、それと対をなす子年の守護仏・千手観音菩薩の梵字を雲のようにデフォルメして地球の両極上になびかせ、地球の守りを願いました。

経済活動も社会組織もいろいろな歪みが生じ、地域社会も国も世界も内側から徐々に崩壊しているような感じで、"安心な生活"はだんだん遠のいて行くような気がします。それだけにもう一度自然との調和に心致し、人間は太陽の恵みによって活かされている一自然物に過ぎないことを肝に銘じて、行動しなければと思うのです。　（2010・4・1）

―2011年ルーブル美術館世界文化遺産登録20周年記念フランス芸術最高勲章受章

白虎と青龍は東西の守護神としても対に。上下で太陽黄道のリングが一つに繋がることでもこの二枚をセットしました。

古代バビロニアの黄道十二宮、古代中国の四神説、古代インドの仏教に端を発する八尊仏、いずれを紐解いても紀元前のはるか昔から、人々は太陽の恵みに感謝しながら、この世の無事存続と幸せを願い、祈りを捧げて来たのだと痛感させられ、人間が野放途になり過ぎ、強欲を暴走させ、掛け替えの無い地球を滅ぼすことが無いようにとこの作を刷り上げました。　（2009・4・1）

―2009年西湖芸術博覧会地球環境賞受賞

―2010年MINERVA国際女性栄誉賞受賞

―2012年*Premium Japan*に収録決定

原爆ドームをモチーフに「母船・地球号の守りⅥ」を2012年第78回旺玄展で発表、7月・10月個展を開催。

HP Silkscreen Prints by F.Yose

阪神大震災を語り継ごう

龍野征代（H17博前人）

1995年1月17日早朝、兵庫県南部に、都市直下型の大地震が発生し、瓦礫の山が築かれました。芦屋に住んでいた私は、家も半壊、避難所生活を強いられました。この時、教員として家庭科教育に携わっていたことから「安らぎの家が崩れる」、「地震に強い住宅とは？」「安全性は？」と考えました。これが私の防災教育の始まりでした。

この頃、勤務校で環境教育に取り組み「人間環境」と銘うち「住まいを取り戻そう」と震災を題材にした授業を作りました。

この授業に取り組んだことをきっかけに勤務校の研修制度を利用し、2003年、奈良女子大学の大学院人間関係学科博士前期課程人間環境学科に入学し、環境文化について学びました。そして、研修後も、震災の惨事を繰り返してはいけないと「阪神大震災を語り継ぐ」授業を今なお続けています。

最初は、崩壊した家を取り戻すために、住居の購入の仕方を指導しました。宿題に出した「家を買おう」のレポートには、家族中で取り組み、家の新築に関われたと嬉しそうな感想が書かれていました。

また、総合学習の時間、地域の人たちに「阪神大震災の話を聞く」ことを課題にインタビューをさせた時、「神戸についてわかったこと」の中に「震災があってこわれかかった神戸だけど、これからもっといい街になるんじゃないかな」と未来への希望が書かれていました。一年前、発生した東日本大震災では、津波の恐ろしさを知り、生徒たちは募金活動を行い、ボランティア活動に参加しました。

震災から十七年が過ぎ、神戸の街はすっかり復興し、人々の記憶から震災の記憶は遠のき、いま授業を受ける生徒たちだれもが、震災を知りません。しかし、教育の場では、現代社会の情報メディアの発達により、阪神大震災の恐ろしさを歴史的文化として、伝えることができます。少しでも犠牲者を減らし、お互いに助け合う心をはぐくむ学びとしての防災教育を、神戸から発信しなければならないのではないでしょうか。

大切なもの　2011・3・11から

池澤直子（S49理化）

2011年3月11日。私にとっての最後の卒業式が終わった。この日は卒業式が最大の出来事であるはずだった。定年を迎える私は、もう自分が直接関わった生徒の卒業式に参加することはないなあとしばし感慨にふけった。いつもの服に着替え、残っている事務処理を一気に片付けようと思った時、あの第一報が耳に飛び込んできた。

卒業以来37年、中学校理科教師として人と自然のかかわりを話し続けてきた。1995年の体験から、地震については格別の思いで、慎重に、そして掘り下げて授業をしてきた。当時、昨日まで教室にいた生徒が亡くなった。前年に妹が生まれたと早退して母親の手助けに帰った生徒の、その母と妹も亡くなった。学校は避難所となり、遺体の安置所になった。

あれから16年。私の特別な日は、日本中の特別な日になってしまった。自分のしてきた授業が頭の中に浮かんだ。元素の周期表の授業～それは私が学生時代にメンデレーエフと出会ったことに端を発したものであるが～をした時、もっときちんとプルトニウムの危険性を伝えるべきだった。自然界には存在せず、人工的にのみ合成される半減期2万400年の猛毒。原子力発電の副産物。「人類の夢をかなえる元素」とも「悪魔の元素」とも言われているこの元素のことを。

教科書と高校入試という制約の中、本当に大切なことを人類の財産として、次の世代を生きていく生徒たちに伝える授業、人間と自然との複雑な関わりを考えることのできる地球市民を育てる授業をめざし、自分なりに教材研究をし、がんばってきたつもりだったけれどまだまだだったと後悔がわき上がった。

その春、後ろ髪を引かれる思いで私は退職した。職業人として生きてきた多忙な37年に自分の意志で一区切りをつけた。学生時代以来はじめて時間にゆとりができた。家族や親、兄弟との時間をたくさん持つことができた。八十を超えた母とも一緒にドライブしたり、お茶のお稽古をしたり。疎遠になっていた友人とも再会。友人に誘われて古事記の学習会に参加したり。時間には限りがある。自分の時間も、誰かと共に過ごす時間も。一緒にいたいと思う人がいる幸せを感じると き、一瞬にして大切な人を失った人々の喪失感を痛感した。天災の後引き起こされてしまった人災を防ぐことをしなかった自分達の行動を悔しく残念に思った。時間のゆとりはまた思いもよらないことをさせてくれた。いただいた鉢植えを枯らさないように、育て方を調べ、水苔を巻いたり、鉢を植え替えたり。今年、胡蝶蘭がまた咲いた。嬉しい限りだ。

娘と一緒に朝顔やミニトマトを植えた。ヘブンリーブルーという外来種の朝顔は秋に咲くということに感動したり、スカーレットオハラは名前から想像していたより小さな花しかつけずがっかりしたり。

何が大切なのか？　便利さや快適さを否定はできない。でもやり過ぎはどこかで止めないと、この大切な地球を滅ぼしてしまう。これからの人生、優先順位を間違わないように生きていきたいと思う。

日々を大切に

岡本京子（H1家修生）

阪神淡路大震災の後、「また明日ね」と言って友達と別れるのが怖くなったと言った生徒がいた。その生徒は、「また明日ね」と安易に口にしてきたけれど、「明日」という日がいきなり来なくなる人もいると身をもってわかったと言った。それまで学校で生徒達はしばしば、「テストは嫌だ、勉強なんて嫌い」と口にしていたこともあったけれど、震災後再開した学校で生徒達が発した言葉は、「学校に来たかった」「友達と会いたかった」だった。

私自身、阪神淡路大震災を経験し、実家は全壊。その後の区画整理事業への対応に家族、地域と苦悩する日々を送った経験を持つ。とはいえ、この17年間で自分自身の中でも、あの衝撃的な経験が「過去」になりつつあることを痛感する。昨年3月11日の東日本大震災後の自分の行動を思い出しても、遠いところで起こっている災害という受けとめ方をしている自分に気づき愕然とした。思えば、日本に限らず世界中で起こる自然災

ガレキの中に咲いた水仙　いわき市豊間にて

害による被害をテレビ等の報道で目の当たりにし、義捐金、支援物資を送るという行為に慣れてしまったのかもしれない。被災した自分が受けた様々な支援を今一度思い出して、自省の念に駆られている。

日常生活を一瞬にして奪い、物だけでなく、家族、友人、知人の命をも奪っていく自然災害。またそれに限らず、戦争や事故などで突然人生を変えられてしまった人たちが世の中には大勢いる。

「行ってきます」と出かけ、無事に帰宅できたというごく当たり前の日々がいかに奇跡的なことか。「今日は特に変わったことがなかった」ということが、実はどんなにありがたいことか。自分に与えられた時間を、出会いを大切に日々過ごさねばと思っている。

田畑ヨシさんの活動に思う

余宮まりえ（H5家修住）

昭和三陸津波体験をもとに、紙芝居「つなみ」を自作し「津波の語り部」として活動されている、岩手県宮古市出身の田畑ヨシさん（八七歳）の話が先日テレビで紹介されていた。

彼女は、幼少期から明治三陸地震の大津波を体験した祖父より、津波の恐ろしさを度々言い聞かされながら育った。八歳の時に、昭和三陸地震が発生。大津波が押し寄せる中、祖父の教え「命てんでんこ」＝「自分の命は自分で守れ」が功を奏し、山の上に避難して生き延びられたそうである。その時の体験を紙芝居にし、約30年以上警鐘を鳴らして来られた中、２０１１年東日本大震災により人生で二度目の津波を体験されたそうである。彼女の話を聞いていたから助かった方もおられたとか。現在も避難先の青森で、子供達に紙芝居を読み聞かせ、防災教育活動の一役を担われているとの事であった。

情報量は膨大でありながら、核家族化から家族間で血の通った知恵を伝承しにくくなった今日、いざという時の行動の指針となる、心に響く正しい教えを次世代に伝えて行く事の大切さを改めて強く感じた。

私自身、阪神淡路大震災で被災した時、あのような災害が起こる事など全く予想していなかった。また東日本大震災の胸が締め付けられるような悲しい映像を何度もテレビを通して見ると、自然には敵わないと無力感に襲われた。

そんな時、田畑さんの活動を知り、過去の災害の詳細を検証し、郷土の歴史を住む人に伝承すること、日常の備えや行動の指針を具体的に生の声で伝えておくことの大切さを改めて感じた次第である。

つなみの恐怖、教訓紙芝居で伝える／
青森2011/08/10 14:02デーリー東北新聞社
http://cgi.daily-tohoku.co.jp/cgi-bin/news/
2011/08/10/new1108101401.htm

芦屋を歩いて

兵井文子（S35文史）

芦屋は山が近い。浜から歩いて一時間もすれば山に入る。阪神、ＪＲまでは平坦であるが、阪急を越えると穏やかな坂となり、浜はずっと下に見える。

芦屋の山は大きく三段になっている。一段目は１００ｍ程の高さで、六麓荘の住宅地をのせている。同じ高さでも芦屋川の西側では弥生時代の集落跡や戦国時代の城跡こそあるが、今ではすっかり山である。二段目は５００ｍを越え、山頂は広く平らで、奥池住宅地が開けている。この奥池を見下ろすように、更に８００ｍまで迫り上がった三段目は六甲最高峰９３１ｍに続いている。六甲の山頂もまた平らである。百万年位前の頃、これらの段面はほぼ同じ高さの低い台地であった。繰り返す激しい地殻変動によって地下深くにあった花崗岩が衝き上げられ、今の山容を成していった。浸食と風化を受けた花崗岩は、割れて巨岩となり砂状となって山を覆い麓を埋めた。

山中より発する芦屋川は浜までの８㎞を急傾斜で流れ下る。大雨になればまるで滝である。押し流された巨岩は砕かれて石垣となり、街を花崗岩特有のほの明るい色で彩っている。暴れ川の芦屋川も下流ではすっかり干上がっていることがある。しかし水は砂地に潜り込んで扇状地を広く潤している。阪神淡路大震災の折には、民家の井戸に「どうぞご自由にお使い下さい」の札が掛っていた。

南芦屋浜より眺める六甲山地は、ゆるやかに西に伸び、須磨でストンと海に入っている。東には生駒山地、金剛山地が遠くに見える。やはり六甲山地と同じく百万年の時を刻んだ断層地形である。

地下は絶えず動いており、変動帯に位置する日本には、至るところに活断層が走っている。次の百万年で山は平地となり、海は山になっているかもしれない。

原発廃棄物を地下３００ｍ以上深い固い岩盤に閉じ込めようという地層処分の危うさを改めて思う。半減期が数十万年以上もある放射性物質を、地球はいつまでその場に止めてくれるであろうか。

阪神淡路大震災後に津知町に出来たテント村と、公園に立つ記念碑

「この町が好き」

海賀美津子（H3家生経）

(一)春は魚たちが　とびはねる
さくらふぶきながす　芦屋川
夏は子どもたちが　あそんでる
白いヨットはしる　あしや浜
海と山を染めて　今日もまた日が昇る
この町が好き　あなたがいるから
ひまわりのような　笑顔に会えるから

(二)秋はとんぼたちを　追いかけよう
山の上に月が　昇るまで
冬は空の星を　見上げよう
夢をそっと星に　あずけよう
海と山を照らし　今日もまた日が昇る
＊この町が好き　あなたがいるから
ひまわりのような　笑顔に会えるから
（＊二回繰り返す）

作詞―芦屋市の小学生達と後藤悦治郎氏（紙ふうせん）、作曲―同氏によるこの歌を、子供が幼稚園に通っていた頃、先生方とよく歌いました。当時越して来たばかりで歌詞の内容を深く思うこともなかったのですが、この土地に居を構え五年になろうとする今、歌詞と同様に芦屋の町の素晴らしさを実感しています。

街中に居ても自然の美しさを身近に感じ、四季折々の情趣を味わえます。

また学校教育においても、教師が児童の心身の成長に大変熱心で、生徒一人一人に手厚いのです。親子で良い環境を享受できたことに有難く感謝する毎日です。

一七年前、阪神淡路大震災の発生により甚大な被害を蒙った芦屋の町が、今やこうして震災の跡形もない程美しく蘇生しています。

東北で被災した方々に、一日も早く町（ふるさと）が復興される日が来ることを願わずにはいられません。

支部だよりに寄せて～

点訳が好き

森安　澄（S34文英）

私、後期高齢者。ウォーキングと点訳の日々です。

奈良女子大の寮で、同室の友人が点字をコツコツと打っているのに興味を引かれ「私もやってみたいな」と思ったのが最初です。

あれから何十年。学生生活、就職、結婚、子育てを経て、ライフワークを模索していました。

夫の第二の職場の関係で大阪の堺に移り住んだ際、再び点訳に出会いました。堺社会福祉協議会の女性大学の点字入門講座に娘と一緒に一年間毎週通い、「娘さんの方が優秀ですな」と先生にからかわれながらも何とか卒業。その後大阪府立盲学校（今は視覚支援学校）の図書室を拠点とする点訳グループ「まどか」に入れていただき、芦屋に居を戻してからも、月一回例会に通いながら活動しています。

始めは点字板に点筆で打っていましたが、その後点字タイプライターへと移行し、今はパソコンが主流となりました。

視覚障害者の普通校への進学が増え、高校の教科書、副読本、参考書等の依頼がありますので、教育委員会主催の専門点訳（英語・数学・理科・古文・情報・図形など）の講習にも参加し、部員それぞれ得意な教科を分担して校正し合いながら対応します。

最近私は楽譜点訳にはまっています。四年間の講習会修了者五人で、楽譜点訳グループ「そら」を立ち上げ、スタジオジブリの曲、ディズニーの曲など点訳し、ブログで公開する予定です。

というわけで、暇さえあればコツコツと点訳しているのです。

社会人五年目の目標

市居愛子（H20生環住）

この度、住環境学科の井上容子先生が、日本建築学会より、名誉ある建築学会賞（論文）を受賞されました。この賞は、学術の進歩に寄与する優れた論文に贈られるものです。心からお祝いを申し上げます。

大学時代、井上先生には大変お世話になりました。入学したら、これまでの勉学生活に区切りをつけ、サークル活動やバイトに明け暮れるのかと、ぼんやり皮算用をしていました。しかし実際は、研究室と実験室を往復する毎日。そして、先生から与えられた卒業論文のテーマに、思いのほか、のめり込んでしまったのです。先生は、研究のイロハをゼミ生に教授することはもちろん、研究、授業や学会発表等々、多忙な日々を送っていらっしゃいました。

無事大学も卒業し、希望の会社にも就職できました。社会人五年目になり、最近、痛感することがあります。それは、社会から認められている方、周りから一目置かれる方は、生活、人生そのものをご自分の目標の一部にとりこんでいることです。だから決して「時間がない」という言い訳はしません。そういう難問を人知れず乗り越え、おまけに、細部にまで目を届かせ、こだわって仕事をしていることです。社会人になって、先生のされたことの半分でもしなければ、到底人を説得するパワーは生まれないと確信しました。

短歌九首

東　昌子（S19文）

咲き満てる花の下ゆく人影のなき
被災地のさびしきさくら
訪ね来る人待つとにはあらねども
暮れゆくさくら見上げ佇む
開きくる花散りてゆく花それぞれに
季（とき）知れるかと見つつ愛しき
散りつもる花びら踏むをためらへど
朝夕にゆくさくらの小径

～フランス留学記～

小林陽子（H14生環住）

Bonjour！ずっと肌寒かったフランスもようやく初夏らしくなって参りました。

私は今、夫と３歳の娘と共にフランス・パリに暮らしながら、日本学術振興会海外特別研究員としてベルサイユにあるフランス国立農学研究所（INRA）で竹の成長過程における細胞壁成分の構造解析を行っています。

今年の４月に渡欧するまでは神戸大学大学院人間発達環境学研究科の井上真理先生の研究室で１年半、お世話になりました。以前は別の大学でポスドク生活を送っていたのですが、出産後、奈良女子大学の先輩である井上先生をご紹介いただき、研究室に受け入れて頂いたのです。井上先生は大学の先輩であると同時に、研究者としての、また、子育ての先輩でもありました。本当に心強く、子育てをしながらの研究に弱気になっていた私は大変勇気づけられました。私もいつか同じように後輩を励ますことができるような活躍をしたいと、心から思っています。

そんな素晴らしい井上先生の研究室を離れるのはとても寂しかったのですが、会社員の夫がパリへ転勤になったのを機に、私もフランス留学に挑戦することに決めました。私にとって、海外での生活も留学も初めてのことであり、渡欧するまでは不安でいっぱい、こちらでの生活が始まってからも戸惑うことばかりですが、それでも何もかもが新鮮で思い切って来てよかったと思います。

毎朝、ベルサイユへはパリから電車で30分ほどかけて通っています。地下を走るMETROとは違い、外の景色も見られて中々気持ちのよい通勤です。日本では考えられないことですが、電車にアコーディオン奏者が乗り込んで来て、陽気に演奏したりするのです。それも鉄道会社が許可しているとか（勿論無許可の演者も沢山いますが・・・）。音楽を愛する国民性らしく、６月21日の夏至にはフランス各地で夜遅くまで音楽フェスティバルが開かれました。パリ市内は勿論、私の通うINRAでも有志のバンドによる演奏会がありました。その日は食堂のメニューもＢＢＱスタイルになり、皆、実験の合間に中庭に出ては盛り上がるというお祭り騒ぎでした。次の週にはまたしても研究所全体での大規模なＢＢＱパーティー、そして７月に入るとご存じの通り、バカンスシーズンの到来です。短い夏をめいっぱい楽しもうとしているように感じます。

働き方や仕事の進め方も日本とは違って、何とものんびりしています。お昼ご飯をゆっくり食べたのち、恒例のカフェタイム、それでも残業はしないという徹底ぶり。ただ、休む時は休む、やる時はやる、というメリハリが効いているような気はします。その証拠に、ちゃんと論文を書いて業績を上げているのです・・・このスタイルを学ぶのも今回の留学の大きな課題です。

また、働く母親が多いのもフランスの特徴です。研究所にも子育てをしながら働く女性研究者や技官の方が沢山いらっしゃいます。何か直接的なサポートがあるようではないのですが、子育てをしながら仕事を続けることが「当たり前」な感じで周囲も自然とそれを受け入れているような、うまく言えないのですが、そんな雰囲気を感じています。私なんて娘を１人抱えているだけでヒイヒイ言っているのに、３人、４人とお子さんを育てながら仕事を続けてこられた方が沢山いらっしゃるのは、本当に頼もしい限りで、大変励まされています。

とはいえ、私の留学はまだまだ始まったばかり。渡欧してたった２ヶ月でもそうだったのですから、これからの生活で「えー！？」と驚くことが続くのだろうなと、不安なような楽しみなような・・・ただ、少々のことには動じない一皮むけた自分になって帰国したいと思います。フランスも日差しがきつくなってきました。パリへお越しの際には日焼け対策をお忘れなく～それでは皆さま、Au revoir！

（写真は自宅の窓より、存在感抜群のエッフェル塔）

湖畔のさくら共に見上げて語らひし
一人の消息とだえたるまま
明るき未来ひらけゆくにか被災地に
幼さな子たちの頬さくら色

唐島幸子（S43文英）

大波に揺れる小舟の慟哭は
幾年経ても増すばかりかな
天翔ける朱鷺や生命の新世紀
愛おしきかな森羅万象
竹林奥に紅葉の棚引けば
夕暮れやらで時はたゆたふ

異国に旅して十句

山崎渺美（S39文教）

風鐸の揺れて異国の夏の空
―中国
原色の団扇飾りし商店街
―韓国
岩峰を写す水際に風露草
―チロル・ドロミテ
赤き月欠けて異国の夏の空
―サハリン
夏空や氷河崩るる音はるか
―ニュージーランド
放れ象ゆっくり乾期の川渡る
―ボツワナ
ワラビーの逃げ支度する夏原野
―タスマニア
やせ犬やマダガスカルに雨期終わる
―マダガスカル
フィヨルドの船に付き来る夏かもめ
―ノルウェー
エーデルワイス危ふき斜面に群れて咲く
―スイス

8・10・11頁の挿画も山崎渺美

特別寄稿

有馬温泉と芦屋

山形隆司
（元芦屋市立美術博物館学芸員）

はじめに

映画『テルマエ・ロマエ』は、古代ローマ人が、現在の日本にタイムスリップして、日本の風呂・温泉を見て感嘆するというストーリーです。これは、日本人の湯に対する愛着を面白おかしく描いた作品と言えるでしょう。

古代ローマには及びませんが、日本における入湯の歴史も古いものです。早くも舒明天皇三年（六三一）に天皇が約三か月間、有馬温泉に滞在したと『日本書紀』に記されています。

この有馬温泉ですが、地図で見ると芦屋から六甲山を越えると非常に近い距離にあることが分かります。そのために有馬温泉と芦屋は、江戸時代には非常に深いつながりをもっていました。今回は、このことについて述べたいと思います。

潮湧きて温泉となる？

寛政十年（一七九八）に刊行された江戸時代の観光案内書『摂津名所図会』には、「湯本薬師堂」という仏堂についての記載があります。その説明によれば、芦屋浜の潮がこのお堂の下をくぐり有馬温泉で湧出していると記されています。また、この仏堂はもとは塩通山報恩寺といって大伽藍であったが、今は建物が一つだけになってしまったとも記されています。

同じように、元禄十四年（一七〇一）に完成した摂津国の地誌『摂陽群談』では、「薬師堂」の項目を立て、有馬温泉にある温泉寺の僧侶が毎月ここに参籠すると記されています。

温泉寺（神戸市北区）

このお堂は、芦屋市西山町の「芦屋廃寺」の場所にありました。芦屋廃寺は、白鳳文化期（七世紀後半）に建立されたとみられる古代寺院跡です。お寺の名称が確定できないので、芦屋廃寺と仮に呼ばれています。ですから芦屋廃寺は、ある時期、塩通山報恩寺と呼ばれていたのかも知れません。

芦屋浜の海水が、有馬で温泉になって湧出しているというのは、現代の感覚からするとちょっと考えられないことです。しかし、当時は一定の信憑性がある説であったようです。

六甲山では、江戸時代にしばしば銅山の開発が計画されました。古文書で確認できるだけでも、延宝元年（一六七三）から安永四年（一七七五）までの間に打出村（現芦屋市）を含む六甲山周辺の村々が十五回も計画を立てています。

これに対して、当時、湯山町と呼ばれていた有馬温泉郷では、毎回、その計画に反対しました。その理由は、坑道を掘れば「湯脈」が断たれるというものでした。どこまでこの説が真剣に信じられていたかは分かりませんが、この説を楯にとって有馬温泉郷は江戸時代を通じて銅山開発計画を阻止し続けたのです。

六甲山を駕籠で越える湯治客

このように六甲山中の銅山開発ついて、芦屋の村々は有馬温泉郷と意見が対立しましたが、その恩恵も受けていました。海辺の村から、六甲山を越えて有馬温泉へ鮮魚が運ばれ、「魚屋（ととや）道」という名称が今に残っていることが有名ですが、江戸時代には魚だけでなく多くの物資が運ばれていました。

天明六年（一七八六）の記録では、本庄と呼ばれた六甲山南麓の九つの村々（現芦屋市・神戸市東灘区）だけでも一八九頭もの牛が荷物運搬に従事していたことが分かります。そして、江戸時代後期の文化三年（一八〇六）には、神崎（現尼崎市）―伊丹―小浜（現宝塚市）―生瀬（現西宮市）を経由して有馬温泉へ至る本来の街道筋の宿場が湯治客の減少に悩み、幕府に訴え出る事態にまで発展しています。その訴えは、六甲山を牛馬や駕籠が通行するので、宿場が衰退して困っているというものでした。

これらの宿場の訴えも、もっともであると思うのですが、六甲山南麓の急勾配を湯治客を乗せた駕籠をかついで登っていた江戸時代の人々の体力を思うと、私などは「昔の人は偉かった」と思うばかりです。

現在では、六甲山の登山道はハイキングの人気スポットとなっています。しかし、江戸時代には有馬温泉へと続く生活道路であり、有馬温泉の存在は、芦屋に住む人々に貴重な現金収入を得る機会を与えていました。

そして現在へ

現在では、阪神芦屋駅を出た阪急バスは、JR芦屋駅・阪急芦屋川駅を経由して、四〇分程度で有馬温泉に到着します。これは、昭和三十六年（一九六一）に芦屋市北部から有馬温泉にかけて「芦有道路」と呼ばれる有料道路が開通したおかげです。この道路を作る際には、六甲山中からナウマン象の歯の化石が見つかっています。

江戸時代、さらに太古に思いをはせて有馬の湯につかるのも一興ではないでしょうか。

六甲山中の石仏（シュラインロード）

山形氏は古文書を発掘し、その解読を通して当時の地域社会の生活や世相などの研究に力を入れていらっしゃいます。（芦屋市在住）もより会で美術博物館を訪ねた折、展示物を丁寧に分かり易く説明して下さいました。佳恵夫人（H11文国際社文）、そのお母様も同窓生と伺い、ご縁に甘えて寄稿をお願いしました。（兵井 記）

文学散歩

芦屋の里の美少女『菟原処女（うないおとめ）』の伝説を訪ねて

岩城尚子（S33文国）

芦屋の名が文学の上で、初めて登場してくるのは万葉集からです。

『芦の屋の菟原処女の八年児（やとせご）の片生ひの時ゆ』　巻九　一八〇八　高橋虫麻呂

万葉集の中で旅と伝説の歌人と言われる高橋虫麻呂のこの長い長い叙事詩によって語られているのが「菟原処女」の伝説です。当時の芦屋は、菟原地方と呼ばれ芦屋から東灘、灘の三つの古墳を含み、旧生田川辺りまでの六甲山麓から海辺までを郡部としていたようです。

これから巡る三つの古墳は、二人の男性に妻問いされて思い悩み、自ら命を絶った美しい処女と、後を追って相次ぎ命を絶った二人の壮士（おとこ）の哀しい伝説を語り伝えています。万葉集では高橋虫麻呂の他、田辺福麻呂（さきまろ）、大伴家持の三人の歌人が墓の伝説を歌に作り、涙を流しました。

更にこの伝説は広まって、平安前期のころ「大和物語」にも「生田川」となり、また室町時代には謡曲「求塚」として謡われてきました。近代に至っては森鴎外が「生田川」という戯曲に書き、上演もされました。

詩人河井酔茗も、明治三四年に詩集「無弦琴」で、「ちぬの海」としてこの恋を詠んでいます。まず、万葉集三人の歌からあらましを辿りましょう。

―芦屋の里の美しい処女は、まだ八歳のころより近所の人々の目にも見せず、家の中で大切に育てられていたので、人々は一目でも見たいものだと思っていました。春の花の匂うように、秋の葉の艶々と照り映えるように麗しい処女を、妻にしたいと思う二人の壮士がおりました。一人は地元の「うない壮士」、もう一人は海の向こうの和泉の国に住む「ちぬ壮士」です。壮士たちはそれぞれ身内の名誉にかけ、命をも捨てて競争しました。太刀をはき、白木の弓と矢を背負い、処女のためなら火にも入ろう、水にも入ろうと対抗して争いました。

これを見た処女は「自分のような賤しい者のために、立派なますらおが二人して争っているのは見るのも辛い」と思い迷い「いっそあの世へ行って黄泉の国で待っていましょう」とあたら若く惜しい命を絶ってしまいました。このことを夢に見たちぬ壮士は処女の死を知り、処女の死んだ辺りを尋ねて自らも命を絶ってしまいました。後に残された地元のうない壮士は天を仰いで叫び、地に伏して喚（わめ）き、負けてはならじと二人の死んだ跡をたずねて、後を追って海に入り自ら命を絶ってしまいました。

一族の者たちは、このことをいつ迄も忘れないように、語り継ぎ言い継ぎゆこうと、処女の墓を真中に造り、壮士の墓は、彼方と此方に造りおきました。―

あらましこのような伝説の長歌が三首ありますが、次に高橋虫麻呂の反歌を二首挙げます。

（巻九　一八一〇・一八一一）

芦の屋の　菟原処女の　奥津城（おくつき）を
ゆき来（く）と見れば　ねのみしなかゆ
墓（つか）の上の木枝（このえ）なびけり
聞しごと　ちぬ壮士にし　よりにけらしも

二首目の反歌の意は、墓の上の木（つげの木）の枝が靡くように、処女は和泉の国のちぬ壮士に少し靡いていたというようです。

同じく万葉集の宮廷歌人であった田辺福麻呂は、この三つの墓を見て詠んでいます。

（巻九　一八〇一）

古の　ますらをのこの　あひきほひ
妻問ひしけむ　芦の屋の　うなひ処女の　奥城を
吾立ち見れば　永き世の語りにしつつ
後人の　偲びにせむと
（中略）この道を　去（ゆ）く人ごとに　行きよりて　居たち嘆かひ　或人は　ねにも
なきつつ　語りつぎ　偲びつぎくる　奥城どころ
われさへに　見れば　悲しも　古思えば

反歌

古の　しぬだをとこの　妻問ひし
うなひ処女の　奥城ぞこれ

（巻九　一八〇二）

※しぬだをとこ＝ちぬ壮士

そして更に万葉集を代表する歌人大伴家持の歌

（巻一九　四二一一）

古に　ありけるわざの　くすはしき　ことを
言ひつぐ　知努（ちぬ）をとこ　菟原壮士の
うつせみの　名を競ふに　妻問ひしける
（中略）聞けば悲しき　春花の　にほえさかえて
秋の葉の　にほひてている　あたらしき
身のさかりすら　丈夫（ますらお）の語り
いとほしみ　父母に　まおしわかれて
家さかり　海辺に出で立ち（略）

反歌

（巻九　四二一二）

をとめらが　後のしるしと黄楊小櫛（つげおぐし）
生ひかわり生ひて　靡きけるかも

「大和物語」では「生田川」の段に

むかし津の国に住む女ありけり。それをよばふ男ふたりなむありける。一人はその国に住む男　姓はうばらになむありける。いまひとりは和泉の国の人になむありける。

（中略）いづれまされりといふべくもあらず。女思ひわづらひぬ（略）

思い悩んだ女は、生田の川に浮かぶ水鳥を射た方にと言って、待っていると、男たちはやすいことだと言って争って水鳥を射た。一人は頭を一人は尾を射た。これを見た女は一層思いわずらい、

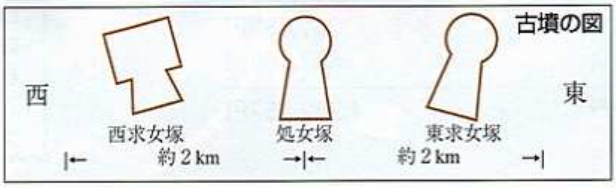
すみわびぬ　わが身投げてむ　津の国の
生田の川は　名のみなりけり

この三つの古墳は造られた時代も、それぞれ異なっているし、規模から言っても三人の墓ではなく、この地方の有力豪族の墓であろうとされています。

しかし、この古墳が処女と二人の壮士の墓でないことが事実であっても、この地に美しくも哀しい恋の物語が伝説として多くの歌や文学の上でも語り継がれ、塚の前で涙する人々があったというロマンを心に偲んで、季節の良い時にはこの辺りを散策してみませんか。

三つの古墳から更に西へ行った灘区岩屋町辺りで国道二号線に面した山側に「敏馬（みぬめ）神社」があり万葉の次の歌が有名です。

玉藻刈る敏馬を過ぎて夏草の
野島（ぬしま）が崎に船ちかづきぬ
（巻三　二五〇）　柿本人麻呂



「東求女塚」―東灘区住吉宮町一丁目　阪神電鉄住吉駅より北東へ一〇〇m　ちぬ壮士の墓と伝えられる　全長約八〇m　前方後円墳

「処女塚」―御影塚町二丁目　阪神石屋川駅から西南へ三〇〇m　前方後円墳　四世紀中頃

「西求女塚」―灘区都通三　阪神西灘駅から南東へ一五〇m　うない壮士の墓と伝えられる　全長九五m　前方後方墳

～事務局だより～

平成23年度事業報告

平成23年4月2日（土）支部役員会（於神戸市立勤労会館）
5月15日（日）支部総会（於楠公会館）
8月25日（木）地区リーダー会（於神戸市立勤労会館）
11月1日（月）「支部だより」第35号発行（西宮地区担当）
11月20日（日）睦会（於ホテル日航姫路（昭和43年卒業者担当）
平成24年1月9日（月）「支部だより」引継ぎ会（於楠公会館）
3月15日（木）第12回佐保塾史跡めぐり
「よみがえる丹波竜と立杭焼の郷を訪ねる」

平成24年度事業計画

平成24年4月7日（土）支部役員会（於神戸市立勤労会館）
5月12日（土）支部総会（於楠公会館）
8月23日（木）地区リーダー会（於神戸市立勤労会館）
11月1日（木）「支部だより」第36号発行（芦屋地区担当）
11月12日（月）睦会（於ホテル竹園芦屋（昭和44年卒業者担当）
11月18日（日）「支部だより」引継ぎ会（於いたみホール）

（参考）平成25年度について

（1）支部総会　6月16日（日）（於神戸凰月堂ホール）
（2）「支部だより」第37号　伊丹地区担当
（3）睦会　昭和45年卒業者担当

平成24年度　佐保会兵庫県支部役員・各委員

役職名	氏名	卒業年学部学科	住所
支部長	岩崎　雅美	S44家被	明石市
副支部長	中井　昌子	S43家食	伊丹市
事務局	山下　知子	S39理物	神戸市東灘区
	村田　好子	S39家食	小野市
	古山美智子	S40理数	神戸市西区
	松本佳代子	S44文英	神戸市東灘区
	永田登喜代	S45理数	加古川市
会計監査	中田　秀子	S37文幼	加古川市
	福永ヒロミ	S45家被	姫路市
楳の会（○印代表）	○片寄眞木子	S36家食	尼崎市
	山下　知子	S39理物	神戸市東灘区
	田中　明子	S43文幼	加古郡稲美町
	中井　昌子	S43家食	伊丹市
	大塚かよ子	S44文幼	姫路市
	永田登喜代	S45理数	加古川市
ホームページ研究会（○印代表）	○中村　京子	S32理物	神戸市東灘区
	山本よしみ	S33家食	神戸市西区
	片寄眞木子	S36家食	尼崎市
	衣笠　弘美	S41文体	神戸市北区
	鈴木美根子	S42家食	神戸市西区
	桂　美穂子	S46理植	姫路市
	丸岡　玲子	S53理数	明石市

H23.8.1～H24.9.30

本部理事	貴田　康乃	S29家住	西宮市
	瀬川　順子	S41文英	神戸市中央区
本部監事	酒居　淑子	S42家住	伊丹市
評議員	山本よしみ	S33家食	神戸市西区
	鈴木　久子	S37家食	尼崎市
	三枝　瑶子	S38文英	神戸市中央区
	川口登美子	S39家食	川西市
会務委員	山本よしみ	S33家食	神戸市西区

H24.10.1～H26.9.28

本部理事	山本よしみ	S33家被	神戸市西区
	瀬川　順子	S41文英	神戸市中央区

平成23年度　会計報告並びに平成24年度会計予算

支出の部

科目名		平成23年度決算	平成24年度予算
本部会費		799,500	800,000
総会補助費		38,487	100,000
通信費		218,960	250,000
印刷費		25,830	30,000
交通費		128,250	70,000
事業費	支部便り印刷費	200,000	200,000
	睦会補助	50,000	50,000
	楳の会	90,000	90,000
	ホームページ研究会	30,000	30,000
	地区リーダー会	46,472	70,000
	もより会補助	100,400	110,000
慶弔費		94,556	100,000
事務費		116,602	160,000
予備費		0	50,000
小計		1,939,057	2,110,000
次年度繰越		4,982,857	4,973,357
合計		6,921,914	7,083,357

収入の部

科目名		平成23年度決算	平成24年度予算
会費		2,011,500	2,030,000
内訳	本部会費	799,500	800,000
	支部会費	1,212,000	1,230,000
貯金利息		140	500
本部より補助		98,880	70,000
雑収入		0	0
寄付		0	0
小計		2,110,520	2,100,500
前年度繰越		4,811,394	4,982,857
合計		6,921,914	7,083,357

資産内訳　（平成24年3月31日現在）

定額郵便貯金	2,450,000円
郵便貯金	1,312,882円
振替貯金	357,689円
現金	862,286円
合計	4,982,857円

編集後記

ロンドン・オリンピックの感動も束の間、領土問題、シリア内戦激化―日本人女性ジャーナリストの死など厳しい状況が続いている。東日本大震災から1年余、減災をテーマに、多くの方々の参加を得て、充実した紙上もより会になった。更に総会でご紹介の代情様の作品がテーマにぴったりで、寄稿をお願いしご快諾戴き、ご縁深い山形学芸員様も面白い切り口で芦屋の歴史の一端をご紹介下さった。化学S33の松木様と菅江先生宅を訪問―神戸の中学時代思い出のウィンナー・ワルツ、海軍予科練時防府で見たやけに明るい空と列車から見た広島の焼野原、差別残るヒューストンでの留学生活、オハイオ出身のお嫁さんやお孫さんの声が聞こえる2世帯住宅でのご生活など聞かせて戴いた。ご協力に深く感謝申し上げます。　編集委員（東・山崎ヒ・兵井・山崎コ・唐島）